

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日逓信省特別授受承認証第第六七二  
期並三十一一年十月十日第三種郵便物認可(毎月一回)白紙行  
平成十六年十二月一日発行(第百七巻)第十一号

# ホトトギス

十二月号



旬日記 汀子

平成十五年十二月一日 ロイヤル俳壇

泉の森の葉ずれの音と聞く  
枯木立見通しのよき帰路となる  
泉の鳴く森抜けて行く山路  
風音の抜けて行く枯木立  
蕪炊いて家居の夕べ句はせし

十二月二日 有桓倶楽部 忘年句会

名苑といふは紅葉の散るときも  
巡路ゆく限り染まりて冬紅葉  
狛犬に母の仕種や冬ぬくし  
日本間を洋間に使ふ冬館  
日当りて来しよりまこと冬紅葉  
背広着し名誉教授の赤セーター  
熱燗の会話となつてゆく時間  
十二月二日 無名会

寒さより逃るる如く着きにけり  
探し物これも師走のこととして  
粕汁を所望す長き旅帰り  
粕汁を用意分らぬ人数に  
ただ银杏黄葉を浴びて駆けつけし  
十二月六日 芦屋ホトトギス会

送葬の列水鳥に見送られ  
短日の暮れてやる気となりけり  
冬枯の庭に残りし色探す

一本の梢に冬芽のありどころ  
十二月七日 日本伝統俳句協会忘年句会

駆けつけて師走の心解き放つ  
寒さにも心して来し夜の帰路  
歩き来し人先に来て師走かな  
十二月七日 関西野分会

冬帝の足音晴を伴ひて  
捨てるもの又増えてみし煤払  
置くもの増えて近づくクリスマス  
焼米といふ手間をかけられしもの  
十二月七日 下萌句会

顔見世の華やぎ席を埋めゆく  
座りたる石の冷たさ身に纏ふ  
校正を終へて気づきぬ冷たき手  
冷たき手気遣ふ握手なりしかな  
枯木には枯木としての姿あり  
十二月九日 大阪倶楽部

あとしばし落葉楽しみおくことに  
寒きこと又口にしてをりしかな  
雑炊に今日の宴を締め括る  
彩りを尽し了せし冬の山  
十二月九日 綿業倶楽部

書齋には置かぬ炬燵でありしかな  
冬木なほ風を誘ひて零すもの  
消息を伝へ来し風冬木立  
十二月十二日 清交社  
東ねたる香よ枯菊に残る色  
枯野にも道あり人の行く限り

年の瀬といふ実感はまだ添はず  
枯野には風の素通りてふことも  
白き波青き波間や冬の海  
香の失せぬことも枯菊なりしかな  
十二月二十日 工業倶楽部

知日や忘れものにも対処して  
短日や雨止みさうで止まぬ日よ  
馴染みたるよりは炬燵の片づかず  
十二月十四日 悼平尾みさお様

冬ぬくき心くばりて旅立たれ  
十二月十七日 夏潮句会

枯萩を刈りて焚く日は又のこと  
枯萩を刈りて命を地に鎮め  
なほ梢にとどまる木の葉時雨かな  
時雨雲追ふ青空のありにけり  
萩枯れて庭の一劃失へり  
やり果せねばならぬ伽年の暮  
十二月二十日 時雨句会

風花のしきりなる中発ちて来し  
火事遠きこと確かめて寝ることに  
山火事を見て寝つかれぬ夜となりし  
雑炊の吹きしづもりてまだ食はず  
風荒き夜の火事と聞くばかりかな  
十二月二十一日 野分会

煤払書庫は表面だけに  
本の煤払へば一日暮れにけり  
冬帝の雲に突つ込み着陸す  
冬帝に従ふ時間ありにけり

## 夜 空

稲畑汀子

「一体どうなってるのかしら、この辺はもう日が差しはじめているのに……」

我々が乗っている新幹線『ひかり』は米原駅に停車したままもう何時間も経っている。静岡駅で乗り換えて三島駅で迎えのバスに乗る予定になっていたが、米原駅に停車した『ひかり』はびくとも動かなくなってしまった。

「静岡地方の豪雨のため全部の列車が停車しています。復帰する見込みは立っていません」

車内放送では三十分置き位に状況の説明らしきものをしてくれるが要領を得ない。おおむね同じ言葉の繰り返しである。静岡地方の豪雨は一時間に九十ミリという降り方だそうである。やがて反対車線に入ってきた『こだま』で大阪方面へお帰り下さいとアナウンスするようになった。

「そつは行かないわよねえ」

一泊の予定で春菜会と関東組有志の合同稽古会に山中湖を目指す我等である。総勢二十名が各地から三島駅を目指して向っている最中なのである。

幹事の安原葉さんはしきりに旅行社の井藤さんと連絡をとっている。お昼になっても動かなければお弁当を確保しなければならぬことに気がついて売店の車両に急いで行き残っているサンドイツチ四個、幕の内一個、それにあるだけのお茶を買い占めて席へ戻った。皆それぞれの車両に座っていたが荷物を持って我々の八号車に移って来た。

、家内が携帯電話で帰ってくるように言うのですが、そうは行かないことになりました」

実三郎さんは何となく不安げである。停車駅でないため始めはドアが開かなかったが、駅ということも幸いしてドアが開き、お弁当を買いに出る人も増えた。

一時半を過ぎた頃ようやく『ひかり』は動き出した。四時間半経過している。関西方面から出席する人は殆どこの列車に乗っているのに誰も帰ろうとはしなかった。しかし三島駅での新しい待ち合わせの時間は幹事に任せなければならぬ。スケジュールは今から立て直しである。三島に着いてみると東京方面から参加した人達を先に昼食を取るバラライカへ送ってくれたバスが戻って来て我々を待つてくれた。

「山形から参加の山形理夫妻と林克己さんは引き返して家に帰ってしまったらしいのです。そのため携帯電話の番号を知らせて置いたのに」

葉さんはがっかりしている。酒井土子、京夫妻は車で山荘へ直接参加される筈であった。句会場の老柳山荘へは妹の朋子が先に

行つて開けておいてくれることになつていた。

バラライカでようやく合流した一行を乗せたバスが山荘に着いたのは五時にならうとしていた。

宿舎のホテルマウント富士での懇親会が終つたのは十時を回つていた。ホテルの庭へ皆で出て見ると月が少し欠けて中天にかかつていた。山中湖が黒く光つて沿岸を縁取る灯が映っている。大雨を降らせた雲は殆ど消えて目を凝らすと富士山の黒い稜線が夜空にくっきり浮かんで見える。

「富士山が見えていますよ」

その時、頂上の辺りに明かりが一つ灯つた。続けてその明かりが裾へ点々と伸びて行く。そこは登山道であらう。

「富士山の稜線がはつきり見えますね」

「本当！」

「明日は山開きじゃないの。きつと明日のご来光を仰ぐために白装束を纏つて山へ登っているのよ。明かりは山小屋の灯なのでしょうね」

次の朝、早起きをした人達は赤富士を見ることができた。

廣太郎句帳

廣太郎

乗り継ぎて継ぎて十二月の祝ぎへ

十二月十六日 草木瓜会忘年句会

十二月七日 小豆島尾崎放哉記念館投句

掃納して新しくなる狭庭

冬風といふ道ありて出港す

掃納猫の額といふ天地

十二月七日 「紫苑」創刊八十周年祝句

青空に傾れなだれて枯蓮

冬帝もこの祝ぎの座へ来りしか

心にも掃納してゐる媼

十二月十日 三番町句会

枯蓮の一万本に風及ぶ

枯柳芭蕉の尻に触れんとす

十二月十八日 登高会忘年句会

根深汗閑東人になり切つて

正客に座の和みたる冬座敷

俳誌祝ぐ余韻に浸り年用意

電飾に絡まつてゐる冬木の芽

枯萱に山従うてをりにけり

雪女郎めきて銀座を行く女

十二月十一日 土筆会忘年句会

物の怪を庭に潜めて冬座敷

十二月一日 遊び人集ふ

先づワイン開けることより年忘

十二月二十四日 若水会忘年句会

十二月四日 蕉心会忘年句会

茅葺を染め上げてゆく散紅葉

双六や去年もいろいろありました

日向ぼこめきて蕉像睨れり

水鳥の尻より浮いて来りけり

手袋を取れば佳人でありにけり

初氷踏めば通学路の騒き

水鳥に後楽園の暮れてゆく

双六やそろそろ余生てふ二文字

水鳥に大川といふ楽土かな

十二月十三日 伝統俳句協会東京・神奈川合同部会

双六に彼女の性を見てしまふ

懐手して蕉像は何処を見る

冬の日に弾き出されし鳩の群

十二月二十五日 目黒学園句会

都鳥空中戦の如く舞ひ

二天門冬日に朱を溶きにけり

冬ざる靴音響く帰宅かな

十二月六日 「紫苑」創刊八十周年記念句会

異国めく仲見世通り小六月

クリスマス的な夜景の都心かな

# 雑詠

## 汀子選

卒業の娘の装ひのとのひし  
冷やかなわれと思ひし別れかな  
一本の老樹の落花なりしかな  
母のこと偲べば星の流れけり  
星流れギリシャ神話を子に語る  
教室に泊り流星観測会  
蝉声に森の凹凸ありにけり  
涼しさに読む標高といふ数字  
映るものみな水色に夏夕べ  
み吉野の奈落へ落花滝となる  
散り止まぬ落花に吉野拾遺あり  
み吉野の奥千本の花の冷  
出水禍の長き停車に耐ふも旅  
また梅雨の虜となりし長停車  
長停車解かれ息つく梅雨の旅  
霧の奥富士のまぼろし凜と在り  
稲妻よ富士の片鱗見せ給へ  
桐一葉富士の大きな黙を落つ

西宮 山田桂梧

同

神戸 藤井啓子

同

八尾 岩垣子鹿

同

福山 竹下陶子

同

京都 安原 葉

同

神戸 長山あや

同

気の張りをゆるめず日々の酷暑にも  
雨上りたる夜の虫の音のしかと  
十月の日和を期待組む旅程  
樽茶室纏ひしものに蛇の衣  
時鳥声の無尽に三瓶野は  
伽のごと夕菅包む句碑なりし  
夏帯に恋の残香ありにけり  
虫眼鏡蟻に見られてをりにけり  
巨人ファン阪神ファンも夜釣人  
那智の滝悠久の音立てながら  
霊峰の熊野三山霧の中  
夕立の過ぎし夜空に風渡る  
大文字逆縁の火となりて燃ゆる  
船形の火の中天の海を航く  
冥土より引綱が出て迎鐘  
落し文何の消息聞けとこそ  
あをあをと一村包む夜の秋  
落し文開けばいのち綿の中  
文字食うべ賢き汝きから虫  
羅をまとひて風をまとひける  
草いきれごと掘り返し家が建つ  
雑念を流す雨脚見て端居  
気負ひなき余生なれども銀河濃し  
体調も先づ先づなれば盆用意

福岡 松尾緑富

同

同

姫路 桑田青虎

同

同

東京 稲畑廣太郎

同

同

広島 肥後重夫

同

同

京都 粟津松彩子

同

同

樞原 稲岡 長

同

同

東京 今井千鶴子

同

同

石川 辻口静夫

同

同

## 雑詠句評（十一月号より）

憲明・葉・忠彦  
美奇・芳子・中正  
保佳・千鶴子・静龍  
青虎・明倫・汀子

### 眉山雪もよひ小諸の虚子をふと 徳島 上崎暮潮

いよいよ眉山は雪になろうとするこんな日にも、虚子先生のごとが偲ばれる。小諸の冬にどう耐えられたであろう。虚子先生は昭和十九年九月から小諸に疎開され昭和二十三年十月までに浅間山麓の冬を三度越された。南で育ち生活して来た虚子先生に、その冬はきびしかった。暮潮さんは虚子先生を小諸にお訪ねした想い出ももっている。

この句の「雪もよひ」によって、雪を兆してくる気象の動きをとらえている。そこに「虚子をふと」の感慨にいたる心の経過まで察することができる。「眉山」は、徳島のシンボル。眉のような稜線をひいてやさしい山である。身近な眉山、はるかな小諸。句に入った二つの固有名詞はひびきあつて余情を広げ、想いが自

然に伝わってくる。（憲明）

作者の住む徳島の眉山に雪が降った。雪のめつたに振らない地での雪は珍しく雪催いを樂しむ気持ちもあったが、ふと小諸に疎開した虚子のことを思い出した作者。小諸は浅間山から吹き下ろす寒い風や厳しい雪の小諸の冬はつらい日もあつたであろう。と思いがんだ作者の心情が伝わってくる。省略された背景が想像される句。（汀子）

### 梅雨暗し細字読み取る灯点して 福岡 松尾縁富

降りつづく梅雨を窓に眺める部屋の中は暗く、昼も灯点して仕事をせねばならないほどである。取分け細字を読み取らねばならない校正作業などは尚更のことで、それに精を出している作者の姿が鮮やかに浮かんでくる。前編集長であり、今も編集校正の裏方として遠隔の地にあつて活躍される作者の日常の姿がよくうかがわれる句である。「細字読み取る灯点して」という具体的な景が捉えられたことよつて、詠まれた季題の心持が一層深く伝わってくる。（葉）

作者は格勤に机に向つて仕事に夢中になつていた。細かい字を読み取ることもしなければならぬ。何となく細かい字が見にくくなつて来たことに気がつき灯を点けた作者。何時の間にか外は梅雨しとど降っていることを知つたのである。仕事にのめり込んでいた作者自身が描けた。（汀子）

# 若水集

## 廣太郎選

初秋・踊

円周を踊り上手な娘が戻る 香川 湯川 雅  
 即入りそびれ踊の輪の遠く 同  
 初秋や下駄買うてみし履いてみし 同  
 新秋の風に再びまどろみぬ 東京 今井肖子  
 新秋や二十九階なる窓辺 同  
 その指の先は未来を指し踊る 同  
 園児らの伸びて縮んで踊の輪 明石 涌羅由美  
 子を連れて踊る輪に入るきつかけに 同  
 故郷に 心をつなぐ踊唄 同  
 踊唄一人に千の手を振れる 島原 平尾圭太  
 深被りせしが美形や踊笠 同  
 阿波踊ホトトギス連近づき来 同  
 踊痴れ吾は日本の原住民 高崎 山口 博  
 初秋の暦たしかに曖昧に 同  
 初秋や 浅間の煙 上州へ 同  
 踊る気の輪に入り込むタイムング 河内長野 橋本佐智  
 初秋のプレタポルテの案内状 同  
 初秋と思ふ目覚めの山気かな 同

初秋の風二の腕をくすぐりて 十日町 小川公巴  
 初秋や句心いつか戻り来し 同  
 十日町小唄踊りて宴果つ 同  
 旅の恥掻き捨て踊れと言はれても 坂出 溝淵和幸  
 お隣を真似ては遅れつつ踊る 同  
 胸に灯の点りて入りし踊の輪 同  
 初秋の音となり来し山雨かな 西宮 田中祥子  
 初秋の闇に富士の威立ち上がる 同  
 初秋の風と巡りぬ虚子山廬 同  
 今年また小さくなりし踊の輪 北九州 本村照香  
 踊の手みな暗がりを引き寄せて 同  
 しづしづと闇に溶けゆく踊かな 同  
 墓山に月を呼び出す踊かな 八尾 岩垣子鹿  
 よく踊るやや小肥りのよかりける 同  
 コンパスのごと立つ踊櫓なる 同  
 初秋の朴より庭を整ふる 大牟田 猿渡青雨  
 初秋の朴より庭の風生るる 同  
 初秋の朴に庭の灯点しけり 同  
 人去りて波音変はる初秋かな 岡山 白石昌弘  
 思はざる人の踊の巧みなる 同  
 進むには退くことも盆踊 同  
 総をどりに妻も出る子等も出る 同  
 さぬき 岡村尚風  
 どつと乗る踊子連の列車 同  
 踊待つ前奏曲の長かりし 同

## 若水集句評 廣太郎

嘗て虚子が行っていた有名な「稽古会」。そこに出席していた人も含めて最近はリニューアルされた「老柳山荘」で汀子主宰を中心に復活されたこの会が丁度この時期開催され、作者も参加されたのである。余分な言葉を一切廃した表現から一層作者の気概を感じる事が出来る。

初秋や下駄買うてみし履いてみし 香川 湯川 雅

夏が終わりようやく涼しくなってきた頃は、やはり女性はおしゃれをしたくなるのだろう。最近ではなかなか「下駄」はおなじみでないのかも知れないが、日本人ならではの美的感覚で、季節に対する気持が見事に語られている。

踊痴れ吾は日本の原住民 高崎 山口 博

今回の兼題「踊」はもちろん盆踊の事である事は周知の通りであるが、日本の伝統的で特徴的な風習を正に日本人の心で詠んでいる句である「日本の原住民」とは、ユニークな表現ではあるが正にその姿を彷彿とさせられる。

新秋や老柳山荘稽古会 東京 桑野英彦

鉦の音に身体まかせて阿波踊 徳 島 渡辺真理子

作者の地名から、さすが地元ならではの雰囲気が出されている句である。御本人も毎年踊られるのであろうか。「身体まかせて」自然に身体が動いてしまうのだろう。地元の人でなければなかなか詠めない表現であるが、読者にも情景が伝わってくるところが非凡としか言いようがない。

初秋の糸口風が探しをり 香川 白井幹子

今年平成十六年は何時までも暑さが続き、これを認めている九月初旬でも東京はまだ真夏のような気温が続いている。しかし何となく風はだんだん涼しくなっているようで、そんな気持を代弁しているような句である。何か風の精が「初秋」を探して持ってきてくれるような詩情に溢れている。

(以下略)